

急速に姿消す戦後秩序

～国際平和実現へ 日本は今こそ努力～ **黒江哲郎**

1945年8月、わが国はポツダム宣言を受諾し、太平洋戦争が終わりました。この終戦の5カ月前、3月9日の未明に東京は未曾有の空襲を受けていました。大量投下された焼夷弾が木造家屋の密集する下町を焼き尽くし、一晩で10万人とも言われる犠牲者を出した「東京大空襲」です。当時浅草に住んでいた私の母は、祖母とともに降り注ぐ焼夷弾と火災からなんとか逃げのび、九死に一生を得ました。母は、14歳の女学生の時に経験したこの夜の東京の有様や、戦時下の生活について繰り返し私に語ってくれました。母の経験談を聞いて育った私は心底戦争を憎むようになり、戦争を繰り返したくないとの思いから、東西冷戦さなかの81年に防衛庁(当時)へと進路を定めました。

第二次世界大戦の後、世界の国々は二度と悲惨な戦争を起こさないため、新たに国際連合(国連)を創設しましたが、同時期に始まったのが米ソ両大国を中心とする東西冷戦でした。国際問題を平和的手段で解決し国際社会の平和と安全を維持することをめざした国連でしたが、東西両陣営の対立により合意形成が困難となりあつという間に機能不全に陥りました。

この時期の日本は、敗戦の苦い記憶が色濃く残る国民感情を背景に、防衛力の強化よりも経済発展に集中し、短期間で驚異的な復興を果たしました。ただし、この軽武装・功利主義の戦略は、北東アジアに位置したため欧米ほどソ連の脅威を感じずに済んだという幸運と、米国という強力な後ろ盾があったために可能となったに過ぎません。しかし、この成功体験は、平和憲法を擁護してさえいれば国際環境がどうであれ平和が訪れるといういささか空想的な「平和主義」にもつながりました。

やがて89年に至りベルリンの壁が崩壊し西側が冷戦に勝利すると、恒久平和への期待が高まります。しかし、直後の90年に勃発したイラクのクウェート侵略とそれに続く湾岸戦争はこうした期待に冷水を浴びせたのでした。

さらに2001年には、911米国同時多発テロが起こります。国家ですらないテロ組織の攻撃により超大国アメリカが大きなダメージを受けたことは、世界に深刻な衝撃を与えました。当時総理官邸に勤務していた私も、貿易センタービルが崩壊する映像を前に「世界が変わってしまった」と呆然としたのを覚えています。

その後、欧米諸国はテロとの闘いに忙殺されることとなります。

冷戦の終結とその後の情勢の流動化は、内向きだった日本の世論にも影響を与えました。国際社会の安定が自国の平和と密接不可分であることを認識した日本は、テロとの闘いにも参加しました。

10 数年に及ぶ闘いの末、テロ攻撃は下火となったものの、同時にアフガニスタンやイラクの国内の混乱と不安定化、宗教対立の激化、米国の疲弊といった負の影響を招きました。さらに、これにつけこむ形で権威主義諸国の挑戦が勢いを増したのです。ウクライナ侵略を続けるロシア、経済力をも武器として自国の影響力拡大を図る中国、国際社会の制止を振り切り核兵器を手にした北朝鮮…。

このような変化を目の当たりにし、わが国もついに防衛力の抜本的強化へと舵を切りました。

一方で、戦後秩序のリーダーとして自由や人権を守ってきた米国は、トランプ2. 0の下でその役割を放棄し、残念ながら自国の利益のみを追求する強欲な国に変貌してしまいました。

終戦から 80 年を経て、我々が親しんできた戦後の国際秩序は急速に姿を消そうとしています。

しかし、80 年前の国連創設時に世界がめざした姿、すなわち全ての国の主権の平等、各国によるルールへの尊重、平和的手段による紛争の解決、これらによる国際の平和と安全の維持といった理想まで失われてはなりません。

わが国は権威主義的な軍事大国に隣接している上、急速な人口減少に直面し、名目GDPは世界第4位に後退しましたが、厳しい現実の前に立ち尽くしている暇はありません。わが国には依然として高い教育を受けた優秀な人材と優れた技術力、さらに諸先輩が営々と築いてきた諸外国との信頼関係といった財産があるのです。

国際社会が岐路に立っている今こそ、志を同じくする国々とともに「多様な国々が平和的に共存共栄できる世界」を実現するために努力すべきだと考えます。

(山形新聞 2025 年 8 月 7 日付「直言」欄からの転載)